宮崎市街図の歴史

郷土史家・田代クリニック院長
田　代　　学

目　次

はじめに
一　江戸期以前に描かれた宮崎
二　江戸期に描かれた宮崎の地図
三　明治時代①宮崎県再置以前
四　明治時代②宮崎県再置後
五　「明治十八年」を冠する宮崎市街図
六　陸地測量部の地図
七　宮崎県地図に添付された宮崎市街図
八　独立した宮崎市街図
九　戦後の宮崎市街図
おわりに

はじめに

昭和四十四年に旧建設省国土地理院内にある日本国際地図学会が『明治以降本邦地図目録』を発刊した。これには明治以降に発行された都道府県別の県・市町村地図名そしてその縮尺・大きさ等が列記され、各地の地図史を知る上で貴重な資料である。しかし、宮崎県に関しては四十七都道府県の中で唯一地図名どころか宮崎県の項目すらなかったのである。この目録作成のために全国レベルでの地図調査が行われたと思われるが、宮崎県においては明治以後の地図の作成・発行等の実態が把握できていなかったために、全く回答できなかったと推測される。その後、昭和六十一年に『明治・大正日本都市地図集成（柏書房）』、平成七年に『日本主要地図集成（朝倉書店）』等が発刊されたが、いずれも宮崎県に関する地図目録は記載されていない。

このような状況にあって、筆者は宮崎市（含・旧宮崎町）に限定してはいるものの『地図からみた宮崎市街成立史（平成八年）』、『宮崎市街字町名誌（平成十年）』、『CD-R宮崎市街図集成併に都市計画図（平成十五年）』の中で同市の地図目録についても報告させていただいた。その後も幾つかの地図を収集することができ、平成二十年度宮崎県文化講座「地図と写真でみる宮崎市街の歴史」の中で報告させていただいた。なお地図目録については巻末に列記するが、これはあくまで筆者が個人的に収集し得た限りのもので、より多くの地図がどこかに存在するものと信じている。

本稿は紙面等の都合もあり、「宮崎市街図の歴史」というタイトルでまとめさせていただくことをご容認いただきたい。なお宮崎市街地とは宮崎市の中心市街地を意味するが、その区域は時代とともに変化している。そのため本稿では宮崎市街地を明確に定めることなく、その地図の歴史と時代背景等を辿っていきたい。

一　江戸期以前に描かれた宮崎

江戸期以前の宮崎に市街地が存在したかどうかは別として、現在の宮崎市街地域を描いた最古の地図はわかっていない。その理由は何らかの理由で宮崎が描かれた地図がどこかに埋もれている可能性があることと、例え地図が確認されていても、描かれた地域が局地過ぎてもしくは記載内容が乏しいために地図として除外されている可能性があげられる。

例えば、明治大学博物館所蔵の「海瀬舟行図（一六六七年）」という絵図には、赤江川そして上ノ町、ミヤザキ、下別府、中村町、城カサキ、赤江川等の文字とともに家屋の図が簡単に記されている。岡山県立図書館所蔵の「西遊雑記（一七八三年）」の「檍原之図」には現在の宮崎市街地域も描かれているが、その中には数多くの神社が記されているだけである。宮崎県立図書館所蔵の「恒久村瀬頭・吉村地境論争関係地図（一八五一年）」には瀬頭、上ノ町、上別府村等が記され、道路や畑地等が記され、局地的とはいえ、かなり詳細な絵地図である。以上、三絵図を例としてあげたが、いずれも宮崎市街図と呼べる範疇の絵地図ではない。

しかし、このような局地の絵地図が集積されることにより、当時の宮崎を知ることができる一つの手がかりになることは否定できない。

二　江戸期に描かれた宮崎の地図

いわゆる地図らしい日本地図が作成されるのは江戸期における幕府による国絵図作成からである。そして（記載内容は別として）現在の宮崎市街地域を含む日向国が最初に記された地図は「日向国絵図」であると思われる。

江戸幕府が行った日向の国絵図作成については、永井哲雄氏の

『日向元禄領国絵図について[1]』、佐々木綱洋氏の『日向国絵図[2]』に詳しいのでご参照していただきたい。

国絵図作成は、慶長・正保・元禄・天保の国絵図事業、さらに寛永十年の巡見使による国絵図を含めると五回行われている。しかし、国立公文書館に正式の国絵図として収納されているのは天保国絵図の全部と元禄国絵図の六ケ国分である。

国絵図（分割）は、縮尺六寸一里（二万千六百分の一）と定められ、国郡区画や国・郡・村名と石高の記載が基本要素となっている。それ以外にも山地、河海、湖沼、集落、道路、橋等が記載されている。日向国の場合は飫肥・高鍋・延岡の諸藩が提出した領内絵図を薩摩藩が集約・清書して幕府に提出するのが通例であり[3]国立公文書館内閣文庫所蔵の「天保の日向国絵図（一七〇二年）」が『宮崎県史通史編近世下』に添付されている。原色のままに一〇〇cm×六〇cmに複製された地図は非常に美しいものであるが、国絵図という性格上、当然ながら宮崎という局地の情報には限りがある。

国絵図等を元に民間レベルでの日本地図が作成され、元禄四年に作成された「日本海山潮陸図」は後述の「赤水図」が作成されるまで百年近くにわたって代表的な日本地図であった。[4]水戸藩の儒者であった長久保赤水が作成した『新日本輿地路程図（一七七八年）』は、製作者の名から『赤水図』とも呼ばれるが、赤水は幕府撰の日本地図をもとにして多くの資料と伝聞を駆使して赤水図を完成させた。地理的良否はともかくも内容の豊富さから、多くの版を重ね明治初期まで用いられた。[5]

赤水図にはすでに赤江川ではなく「大淀川」と記され、その北岸には宮崎、神武社等の文字が記されている。中原、北方等と大淀川の位置関係には多少問題があるが、日本地図に描かれた宮崎と考えると大した間違いではないのかも知れない。

清武川河口に「大渡（おおど？）川」と記されているが、伊能忠敬の測量日誌（一八一〇年四月二十二日）には「赤水図ニ大渡川トアルハ誤リナリ」と記され、忠敬が赤水図も参考にして宮崎を含む全国測量をしていたことが理解される。忠敬の言う「誤リナリ」とは、大渡が中村町と上別府村を結ぶ渡し名であることから、大渡川は清武川ではなく大淀川に記されるべきと判断していたのかも知れない。

図1　文化7年(1810)年「宮崎郡御領分御引渡絵図」明治大学博物館所蔵

『文政天保（一八一八～一八四四年）国郡全図』は、全国国郡を掲載した日本図帳である。宮崎部分を見ると、前述の「新日本輿地路程図（一七七八年）」に酷似しているが、記載された地名が多くなっているものの、「中村」、「ソイ」ともに間違って大淀川以北に記載されているなど、局地的には正確性に欠ける地図である。

藩政時代に製作された地図の中で最も有名で精度の高いものは、伊能忠敬（一七四五～一八一八年）の地図である。しかし、彼の作成した地図は「大日本沿海実測図」と称されるように海岸線を測量した地図であり、宮崎という局地の市街図としての情報は乏しい。